

【編集後記】

◇まずは、5月に出版を予定していたIRATSUME21号の発行が遅れたことを、深くお詫びいたします。

今年は、阪神大震災の起きた1995年に匹敵するくらい、身のまわりでさまざまな出来事がありました。

まず、正月気分も抜け切らない1月に日本海で発生した、タンカーの重油流出事故。但馬地方の海岸部も被害をもろに受け、流れ着いた重油は自然界や人々の生活に重く暗い陰を落としました。海岸部の昆虫たちは、どうなったのでしょうか？ こんなとき、基礎となるデータをもっていない弱さを痛感します。せめて、その後の海岸部の昆虫相の動向を調べていくことが、われわれ地方同好会の役目ではないでしょうか？

また、かつて当会会員で、近年は中国をフィールドに活躍していた北脇和光氏が亡くなったのも、衝撃でした。これをきっかけに、自分に残された“時間”をつよく意識するようになりました。

「そのうちに...と思っていることは、そのほとんどが実現しない、忙しいなか、やって初めて形になる」これは、近ごろ痛感することです。“忙しい”を言い訳にしているうちは、まず駄目なのです。

あなたは、どんな虫屋人生を送っていますか？ 昆虫を探集して、標本箱を埋めていくのも楽しいけれど、それがすべてでしょうか？ 虫を楽しみつつ経験を重ね、データを基に世間に対しても適切な意見が言える。そんな“社会派”虫屋を目指すというのは、いかがでしょうか？ その第一歩として、身近な記録を埋もれさせず、IRATSUMEに発表してみてください。 （谷角）

◇20号の編集後記を書いてから1年以上がたちました。この1年は個人的に激動の年でした。

何と言っても、昨夏の人事異動で、比較的時間を自由に使えた研究所から、本社営業本部へ転勤になりました。長年住み慣れた長野から横浜へと、居住環境も変わりましたが、それ以上に、これまで職場で行えたIRATSUMEの編集作業が全くできず、すべて自宅で行わざるを得なくなりました。昨年までは深夜研究所に残り、谷角氏と電話でやりとりしながら最後の編集作業を行えたのですが...

ただし、今回の出版の遅れはそれとは関係ありません。あくまでも編集担当者の怠慢が第一の原因ですので、ご迷惑をおかけした皆様に深くお詫び申し上げます。

次号の原稿を募集いたしておりますが、今回のような遅れがでないよう、編集担当一同、心して当たります。ご投稿よろしくお願いします。 （石田）

◇但馬を離れてから3年になります。但馬に通っていた頃は「地域」にこだわり、そのカミキリムシだけをひたむきに追いかけていました。その後、国内各地や海外にも出かけるようになりましたが、場所や対象の虫は変わっても、興味をおぼえる事柄はあの頃とあまり変わっていないと思います。

但馬の虫に関しても、これまで私は本誌に、毎年の採集記録を羅列するという形で関わってきました。これからはそれらの記録をもとにいろいろ考えて、そしてやはり書き続けることができるよう努力したいと思います。IRATSUMEの蓄積をより活かすためにも。 （永幡）

I R A T S U M E No.21

1997年11月15日発行

発行者：但馬むしの会

〒669-68 兵庫県美方郡温泉町 黒井和之方

編集者：谷角素彦・石田達也・永幡嘉之